

かくも
甘く切なき
内藤さん

関田 涙 

「あーあ。なんかおもしろいことはないかねえ」

南風商店町の高級マンションから出てきた内藤さんは、青空に向かって大きなあくびをひとつしました。

「今日は空手の道場も休みだし、退屈でしょうがないよ。しかたない。日向でも、からかいにいくか」といいながら、南風小学校のほうへ歩き出す内藤さん。

ところが、校門から出てきた日向は、内藤さんの顔をみるなり、こういったのです。「ごめーん。今日は、私も月乃ちゃんも塾なんだ。だから、遊んであげられないの」「ちえつ。つまんないな」

「だったら、シムシムにいけば」

「あら、ひなちゃん。シムシムは、今日、定休日よ」

がっかりした内藤さんですが、かといって、ゆくところもなかったもので、南風商店街に向かうことにしました。魚屋の前にある大きな水槽でもながめて時間をつぶ

そうと思ったのです。

日向たちと別れ、ブラブラ歩き出したとき、内藤さんは、うしろから木の杖で肩をポンとたたかれました。

振り向くと、そこにおじいさんが立っています。

「おー。松山のじいさん」

「退屈そうじゃのう。あんたも、いっしょにくるかい？」

「へ？ どこへだい？」

内藤さんがたずねると、おじいさんはピンと立てた人さし指と中指を手前に倒す仕草をしました。

意味がわからないまま、おじいさんのあとについてゆくと、そこは、なんと朝丘理髪店だったので。

次の日から、内藤さんの趣味に将棋が加わったことはいうまでもありません。